

近年、「ご当地物」が人々ターなどさまざまな「ご当地物」があるが、実は身近品、マスコットキャラク



唐糸御前百年忌の板碑

(藤崎町唐糸御前史跡公園内、2010年7月19日・葛谷大輔撮影)

れない「ご当地物」もあり、それが地域にのこる伝説である。伝説は、各地に類似したものが多く存在するが、それぞれの地域でその風土や歴史の特徴を織り交ぜながら伝えられることから、地域性のある「ご当地物」といってよいだろう。今回は、藤崎町に伝わる「唐糸御前伝説」を紹介してみよう。

## 唐糸御前伝説と津軽

葛谷 大輔

(県民生活文化課  
県史編さんグループ非常勤嘱託員)

よう。

資料によって細部に若干の違いはあるが、唐糸御前伝説はおおよそ次のようなものである。唐糸御前は、鎌倉幕府五代執権北条時頼の寵愛を受けていた妾であったが、他の正室や側室らの妬みを買って藤崎に逃れた。その後唐糸御前は、時頼廻国の噂を聞いたものの、自らの容姿の衰えを嘆

き、柳の池に身を投げた。時頼はそれを聞いて嘆き悲しみ、弘長3年(1263)、荒廃していた平等教院(霊基寺とも)を護国寺として復興し、唐糸御前の菩提を弔ったという。のちに護国寺は焼失したが、満蔵寺(現弘前市万蔵寺)として再建され、慶長年間には弘前城下に移転されたという。

以上のような内容であるが、藤崎町には、この伝説に大いに関連する延文4年(1359)の年紀が入った板碑がのこっている。この板碑は、江戸時代には弘前藩士をはじめ多くの人々に実見、あるいは模写されたものである。菅江真澄の「つがるのおち」寛政9年(1797)5月27日付けの記事によれば、唐糸御前の百年忌に建立されたものであるという。弘前藩の官撰史書『津軽一統志』など藩内の資料にもこの伝説に関する記事が見え、地域の伝説として定着して

いった様子がかがわれ

る。さらに、この唐糸御前伝説は、弘前藩主津軽家の系譜にも利用されていた。4代藩主津軽信政の弟である可足が津軽家の先祖について記した『可足権僧正筆記』は、唐糸御前は、藤崎に逃れたのち平泉藤原氏の子孫で近衛家の血筋も引く藤原秀直の妻になったと記されている。そして、その子孫が南部家と血縁関係となり、その結びつきの上に津軽家が成り立っていると記した。これは、津軽家が津軽郡の領主にふさわしい由緒を持つていることを示すための脚色であるが、このような大名家の系譜を飾る素材としても、地域の伝説は利用されていたのである。前述の延文4年の板碑がある場所一帯は、現在、唐糸御前史跡公園として整備されている。青森県内に他どのような伝説がのこっているのか、探訪してみるのも面白いかもしれない。